

21 超音波パルスドプラ法による門脈血流の生理的変動の検討 — 食物摂取の影響について —

大橋真友奈・伊東佐知子・古川 聖佳
渡辺 雅史*

新潟大学医学部保健学科検査技術科学
専攻4年
同 基礎生体情報学講座*

【目的】パルスドプラ法を用いて、カロリー負荷ならびに咀嚼・嚥下・消化管の伸展刺激が門脈血流量に及ぼす影響を検討した。

【方法】対象は肝機能が正常な20代女性3名。負荷内容は150, 350, 550kcalの固形カロリーメイト負荷, 液体カロリーメイト負荷, パラフィン咀嚼, 飲水負荷とした。計測は門脈右枝が最も明瞭に描出される部位で行った。

【結果】各種カロリー負荷により、門脈血流量は負荷後15～30分で最大となり、血流量が摂取前の状態に戻るまでには1～3時間を要した。この時間はカロリー量の増加に伴い延長した。最大門脈血流量は摂取カロリー量に比例して増加する傾向が認められ、550kcal摂取では30分後に負荷前の2倍まで増加した。また、カロリー負荷のないパラフィン咀嚼や飲水においても約30%血流量が増加した。

【結論】門脈血流の増加はカロリー負荷に加えて咀嚼・嚥下・消化管の伸展など多くの要素が関与しているものと思われた。

22 胆管肝静脈瘻が原因と考えられた air embolism の1例

岡 宏充・佐藤 知巳・稲田 勢介
波田野 徹・富所 隆・古川 明

厚生連長岡中央総合病院内科

症例は88歳、女性。胆道再建術後も頻回胆管炎を繰り返し、2005/10/24再度胆管炎にて入院。11/1直視内視鏡での採石中、胆道出血の後、ショック状態となり気管内挿管後CT施行。頭部は異常無しだが、右心系及び左心系にも air density を認めた。その後VF出現し除細動を計5回施行。11/2には血管内の air density は全て消失し

たが、肝表面に血腫出現。食事開始後に肝膿瘍の出現を認めたが肝膿瘍ドレナージにて、炎症は速やかに改善し、1/31退院。今症例は術後変化、頻回の胆管炎による胆管壁の脆弱化を元に、検査時の胆道内圧上昇及びカニューレにより、胆管肝静脈瘻を形成し、多量の air が肝静脈を介し、大循環系に流入したと考えられた。頭低位保持にて脳塞栓を予防し得た。胆道再建術後及び肝生検、PTCD後の患者へのERCPは、空気塞栓も合併症として念頭におく必要があると考えられた。

23 肝血管肉腫の1例

麻植ホルム正之・森 健次・太幡 敬洋
渡辺 庄治・川口 誠*

新潟労災病院内科
同 病理部*

【はじめに】

肝血管肉腫は血管内皮細胞由来の腫瘍で、肝原発性悪性腫瘍剖検例のなかで約1%程度と稀な疾患である。原因としてトロトラスト、塩化ビニールモノマーなどの関連が指摘されているが原因不明のものが大半を占める。予後は極めて不良で確立された治療法はない。

【目的】

今回我々は画像診断及び病理組織学的所見で肝血管肉腫と診断した症例を経験したので若干の文献的考察を加え報告する。

【方法】

1994～2005年までに本邦で報告された30例に当院において経験された1症例を加え年齢、性別、原因、主訴、診断根拠、予後について検討を行った。

症例は79歳、男性。主訴は心窩部痛と腹部膨満感。当院で喘息、肺気腫で外来通院していた。突然の心窩部痛が出現し当院を受診、肝機能異常と貧血を認め、腹部超音波検査で多発性肝腫瘍、腹水があり入院となった。腹部造影CTで肝臓と脾臓にびまん性の高吸収域、及び多量の腹水を認め、画像所見より肝血管肉腫と診断した。入院後徐々に腹部膨満感が増強し貧血増悪、入院第9日